

## 折々の銘 9

### 【聴雪】ちやうせつ

「聴雪」(雪を聴く)と書かれた横物を初めて拝見した時、詩情に富む言葉にささやかな感動を覚ええました。

禅語としての「聴雪」は虚堂智愚の偈頌が出典のようです。

・聴雪 虚堂

寒夜風無く 竹に声有り。疎々密々 松櫓を透る。耳聞くは似かず 心聞の好きに。  
歇却す 燈前半卷の経

さらに南宋の虚堂智愚より古く、唐の鄭巢の五言律詩に原典が見つかりました。

・送象上人還山中 鄭巢

竹錫與袈裟。靈山笑暗霞。泉痕生淨鮮。燒力落寒花。高戸間聴雪。空窗靜擣茶。終期宿華頂。  
須會説三巴。(『全唐詩』五百四)

「高戸[コウト]の間[スキマ]に雪を聴き、空窗[クウソウ]静かに茶を擣[ツ]く」とあります。雪を聴きながらの喫茶とは、何とも良い詩に出合ったものだと思います。

聴雪のように詩情に富む言葉は、無理に現代語訳しない方が含みが広くよいのですが、あえて辞書的に訳すと、「雪の音を聴くこと。雪の気配を感じ取るほどの心静かな心境を表わす言葉」となるのでしょうか。

掛物か茶杓の銘が「聴雪」ならば筒茶碗が合いますよね。皆様はどんな道具組が思い浮かびますか。

それにしても、詩の中の「茶を擣[ツ]く」とは如何なる所作なのでしょう。

「茶を擣く」という表現は嵯峨天皇の漢詩の中にも見られます。

・詩を吟じ香茗(茶)を擣くを厭わず。興に乗じて宜しく雅弾を聴くべし『凌雲集』より

お抹茶は宋の時代から、日本では鎌倉時代から始まったことは皆様ご存知のとおりです。鄭巢や嵯峨天皇の活躍した唐・平安初期に飲まれていた茶は団茶です。

従って「茶を擣く」という所作は団茶の製法、あるいは淹れ方に属するはずです。

唐の陸羽の『茶経』には当時の団茶の製法が詳しく書かれています。それに従って製法、淹れ方を大まかに箇条書きにしてみましょう。

①茶の葉を摘み蒸して発酵を止める。②臼で擣き型に入れて固める。③乾燥させる。

さらに淹れ方は④火で炙る。⑤薬研(やげん)で粉にする。⑥湯に入れ煮出す。

『茶経』の中で「擣く」という作業は②にのみ使われています。

しかし、臼で擣き型に入れて固めるのは職人仕事ですので、鄭巢が雪を聴きながら、嵯峨天皇が

詩を吟じ琵琶を聴きながらの所作とは思えません。

これはやはり製法ではなく、④番からの茶の淹れ方の所作ではないでしょうか。

火で炙る前に適量を取り出す所作か、薬研(やげん)で粉にする所作を「擣く」と言ったのでは…。

もしかすると、茶を淹れる所作全般を総称しているのかもしれませんが。

どなたか詳しい方がいらっしゃいましたら、ご教示を戴きたいところです。

十数年ほど前、私はある道具屋さんで藤村庸軒の次男、正員の筆になる「聴雪」の横物を見たことがあります。筆勢は瑞々しさに溢れ、誠実な人柄が滲み出ていました。

優柔不断な私は二・三日ぐず愚図してしまい、その間他人の手に…。入手しておくべきであったと未だに悔いています。茶道具は買って後悔、買わずに後悔がありますよね。

もし、その掛物を手に入れた方がいらっしゃいましたら、是非その軸を掛け、私を茶事に招いて戴きたいものです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~